

## 登録犬は15匹、症状をやわらげるお手伝い

トワーム小江戸病院は、認知症専門の入院施設だ。内科や外科の治療はもちろん、「普通の生活に復帰する」ことを目標に、リハビリやセラピーを積極的に

おこなっている。共有スペースは認知症状特有の徘徊に対応すべく設計され、ナースセンターを中心にぐるりと一周できるようになっている。

扉を開けると、賑やかな雰囲気だ。大きな物音を立てる人も、大声を出す人もいない。それでも華やかなのは、複数のセラピー犬がしっぽを振りながら、お仕事中。だからだ。日本ス



毎日のセラピー犬の訪問を楽しみにしている人も多いという

ピッツ、トイプードル、ミニチュアシュナウザー、ラブラドル・レトリバー。胸に抱える人、膝に乗せておやつをあげる人、共有スペースをぐるぐると散歩する人。ドッグセラピーを体感中の人々で、共通しているのはみな笑顔ということだ。

ドッグセラピスト主任の三橋知子さんは言う。

「みなさん本当にうれしそうな表情をしてくれます。環境の変化やストレスは認知症を悪化させる原因でもあるので、セラピー犬とふれ合うことで、刺激や癒やしを感じ、認知症状の進行を少しでもやわらげられれば」

同院では2008年の開院時からドッグセラピーを始め、当時1人だったセラピストは現在6人にまで増えた。特筆すべきは、セラピストが病院専属職員であり、セラピー犬はすべてセラピストの飼い犬であるということ。性格がよくわかり、コントロールしやすいという。1人あたり1〜3匹を飼っており、セラピー犬としての登録は合計で15匹になる。

## 心を癒やすセラピー犬 リハビリ効果に一躍

取材・文／岡本直里（編集部）

### 訓練と欠かさない衛生管理 犬嫌いでも変化をみせる

ドッグセラピーの歴史は浅く、医療施設に浸透しているとはまだいえない。ボランティア団体やNPO法人が、決まった日時に病院を訪れるという方法が大半だ。そのなかで同院は、少なくとも2匹が毎日1時間以上、共有スペースをはじめ院内のさまざまな場所で活動している。天気がよければみなで一緒に中庭に出ることも。

「あるじに従うだけでなく、「要求行動」ができるかどうかが目印。導犬と違うところです。名前を呼ばれたら必ず目を見たり、おやつが欲しいとお手をしたり、おもちゃを投げてとねだったり、これらも訓練しています」

そう話すのはドッグセラピストの小林美千代さんだ。また、活動前後の全身清拭や毎日の歯みがき、ブラッシング、ワクチン接種など、衛生管理も欠かさない。犬のストレスはないのを見ていると、なんとも気持ちよさそうに患者の腕の中で寝てし



済陽輝久病院理事長（後列中央）とドッグセラピスト。セラピー犬と患者に対する愛情が深い

まっていた。優しくなでられ心地いらしい。一方リハビリ室では、歩行訓練をする人の先にその様子を見つめるセラピー犬がいる。ここがゴールだよと言っているようだ。

「リハビリに消極的だった方が、セラピー犬と一緒にいることで積極的になることがあります。暴力をふるったり大声を出したりする方が穏やかになることも珍しくありません。入院時にアンケートをとって犬が嫌いな人には近寄らないようにしていますが、いつの間にか、ふれ合っていることも多いです」（小林さん）

セラピー犬をおして良好な関係を築き、ひいては治療に貢献する。ドッグセラピーならではの光景だ。